

# ドイツ語冠詞指導の授業実践へ向けての予備的考察

磯村尚弘

(愛知教育大学非常勤講師)

## Preliminary Considerations toward Classroom Practice of Teaching German Articles

Naohiro Isomura

(Part Time Lecturer, Aichi University of Education)

**概要** 日本語母語話者にとってドイツ語の冠詞の習得は難しい。定冠詞、不定冠詞、無冠詞の名詞句を用いるドイツ語文は初歩の段階から多く登場し、学習が進むにつれて学生からこれらの冠詞の用法について多くの質問が出てくるが、大学で用いられるドイツ語教科書では冠詞に関する説明は少なく、学習者の要望に応えていないのではないかとと思われる。そこで本稿ではドイツ語の冠詞に関する先行研究や冠詞の指導に関する先行研究、そして教科書で冠詞はどのように説明されているかを調査したのち、ドイツ語同様冠詞が存在する英語の冠詞の指導に注目し先行研究や冠詞の用法に関する解説を調査した。

**Keywords** : ドイツ語、ドイツ語冠詞、ドイツ語教育

### 1. はじめに

日本語母語話者にとってドイツ語の冠詞の習得は難しい。定冠詞、不定冠詞、無冠詞の用法に限って考えてみても、これらの使い分けについて理解するのは困難である。

一方で定冠詞、不定冠詞、無冠詞の名詞句を用いるドイツ語文は初歩の段階から多く登場しており、学習が進むにつれて学生からこれらの冠詞の用法について多くの質問が出てくる。しかし教科書にはこれらの冠詞の用法について「英語の the に相当する」「英語の a に相当する」などといった説明のみなされる場合が多い。また無冠詞の用法については無冠詞の名詞句を用いた構文が登場したときに簡単に説明されているだけのものが多い。

そこで本稿ではドイツ語の学習で初歩の段階から登場する定冠詞、不定冠詞、無冠詞の用法について、どこまでをどのように指導するのが初歩の段階に合致しているのかを今後考察するための準備段階として以下のことを調査し報告する。まずドイツ語の定冠詞・不定冠詞および無冠詞の用法についての先行研究と、この研究成果がドイツ語の教科書ではどのように扱われているかを調査する。このとき教科書については、現在の大学のドイツ語教育で一つの到達点として採用されている「ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)」の A1 レベルに準拠しているものと準拠していないもの両方の教科書において冠詞がどのように取り上げられ、解説されているかを調査する。次に冠詞の指導に関する先行研究について調査したのち、日本語母語話

者の多くが学習し、ドイツ語と同様冠詞がある英語に注目して、その冠詞の指導に関する先行研究について調査し報告する。そして英語の冠詞について伊藤笏康が行っている解説<sup>1</sup>に着目し、この解説がドイツ語の冠詞指導でも応用できないかを検討する。

### 2. ドイツ語の冠詞研究

ドイツ語の冠詞については、すでに関口存男<sup>2</sup>や有田潤<sup>3</sup>による研究があるが、特に関口の研究成果については細谷行輝らによって紹介されている。<sup>4</sup> 本稿は冠詞の用法そのものを考察対象とするものではないので、それぞれの冠詞の用法については関口が示した分類を紹介し、分類の問題点を示すのみにとどめておく。

まず定冠詞の用法について関口は、①指示力なき指示詞としての用法(「その…」)、②通念を表す用法(「そもそも…というもの」)、③形式的定冠詞の用法の三つに分類して概観している。<sup>5</sup>

不定冠詞については、言及された対象が受け手にとって識別が不可能であると送り手が認識した場合に用いられ、対象となる名詞に冠せる。<sup>6</sup> しかしその対象が特定な場合もあれば不特定な場合もあるし、対象が受け手にとって識別が可能であると送り手が認識していても対象そのものは不特定である場合もある。<sup>7</sup> このことをふまえて不定冠詞の用法を④个体差を表す用法、⑤不定性を表す用法、⑥質を強調する用法、⑦仮構性の含みを表す用法の四つの用

法に分類している。

そして無冠詞についてであるが、無冠詞で名詞が用いられるのは⑧不定冠詞の不定性を表す用法に相当する用法、⑨不特定多数を表す複数形に冠せる用法、⑩当該の“語”を際立たせる用法、⑪名詞と共に熟語を構成する用法、そして⑫固有名詞の五つである。<sup>8</sup>

ところでこうした研究成果から、特定の存在を表している名詞には定冠詞が、不特定の存在を表している名詞には不定冠詞が適当であると単純に考えられたり説明されたりしがちであるが、こうした解釈はしばしば誤解を生むと中村俊子は以下に示す例をあげて指摘している。中村によれば、以下の文は特定の存在を表している名詞に不定冠詞が冠せられている例である。<sup>9</sup>

**Ich schenke Renate zum Geburtstag ein Buch.**

という文について、この文によって発せられる場面は二通りに解釈できると中村は指摘する。まず、「私」にはすでに目当ての本が一冊あり(例えば、すでに買ってある)、それをレナテにプレゼントする場面である。この場合 **Buch** は送り手にとって特定の存在であるが、この文での送り手 **ich** は受け手がその本について何も知らない、つまり **Buch** は受け手にとって未知の情報であることを送り手は認識しているので、**Buch** には不定冠詞を冠している、というものである。二つ目の解釈は、「私」にはまだ目当ての本がなく(例えばまだ買ってない)、これから適当な本を探そうとする場面である。この場合送り手は **Buch** が自身にとってのみならず送り手にとっても未知の情報であると認識しており、**Buch** に不定冠詞を冠している、というものである。<sup>10</sup>

この例のように対象が送り手によって特定の存在であると認識されている場合であっても、受け手にとって情報として不特定であると送り手が認定すれば対象を表す名詞には不定冠詞が冠せられる。中村は、冠詞の選択に決定的なのは受け手の情報に関する既知/未知の程度についての送り手の判断なのであって、特定/不特定というカテゴリーを安易に用いることはできないと指摘している。<sup>11</sup>

### 3. ドイツ語の冠詞指導に関する先行研究

前節では冠詞の選択は、情報の受け手の情報に関する既

知/未知の程度を情報の送り手が判断することによって決まる、という点があることを指摘したが、下川浩はドイツ語の文法書における冠詞や冠詞の区分けの説明にも問題があり、この問題がドイツ語の文法教育における冠詞の指導を遅らせている要因なのではないかと指摘している。<sup>12</sup> 下川はドイツ語の文法教育には実用論の開発が必須であると主張し、実用論の開発を阻害している理由を探るためにドイツ語の代表的な文法書である **DUDEN** や **Herbig/Buscha** による冠詞の分類と使い分けの説明について検討している。

例えば **DUDEN** では、冠詞の用法の一般的な規定は、不定冠詞、あるいは無冠詞で表されるものは「まだ同定されえない不定かつ未知のもの」<sup>13</sup>であり、定冠詞で表されるものは「同定される既定かつ特定のもの」である、とされている。<sup>14</sup>しかし **DUDEN** ではこうした区別は、「一群の生物あるいは事物のすべて」に共通する「普遍的」な「特徴または性質」が述べられる場合には当てはまらない、とされる。<sup>15</sup>そしてこうした場合を表す例文として以下の文を挙げている。

(1) *Ein Baum* ist eine Pflanze.

(2) *Bäume* sind Pflanzen.

(3) *Der Baum* ist eine Pflanze.

(4) *Die Bäume* sind Pflanzen.

そしてこうした場合もちいられている **ein** というのは不定性を表しているのではなく定冠詞が用いられているときのように各々は既知のものとして前提されている、と **DUDEN** は説明しているが、<sup>16</sup>こうした説明は **DUDEN** の示した最初の定義と矛盾するのではないかと下川は批判している。<sup>17</sup>下川は他にも **Herbig/Buscha** の冠詞の区分に関する説明の問題点を指摘し、<sup>18</sup>ドイツ語の文法教育の発展に必要な実用論の開発が立ち遅れているのは先ほど挙げた代表的な文法書においてさえ冠詞の区分の説明が首尾一貫していないのが理由の一つであり、これは早急に改善されなければならないと主張している。<sup>19</sup>

### 4. ドイツ語教科書での定冠詞、不定冠詞、無冠詞の扱い

ところで前述したドイツ語の冠詞の研究成果がすべて

ドイツ語の教科書に入っているわけではない。この節では日本で出版されたドイツ語の教科書では定冠詞、不定冠詞、無冠詞がどのように扱われているかについて述べる。まず CEFR の A1 レベルという基準を設けていないタイプの教科書ではどのような説明がなされているかを示し、次に A1 レベルに準拠している教科書についてみていく。

#### 4-1. A1 レベルという基準を設けていないタイプの教科書

このタイプに区分される教科書では定冠詞・不定冠詞の用法の扱いについて二つのタイプがある。まず一つ目は定冠詞と不定冠詞の用法についての説明が無く、こうした冠詞を文法上の性の区分によって使い分けるという解説にとどめているものである。<sup>20</sup>

二つ目は定冠詞と不定冠詞の用法に関する解説がなされているものである。そのとき定冠詞であれば「英語の the に相当する」、不定冠詞であれば「英語の a, an に相当する」と書かれている。例えばある教科書では定冠詞について「定冠詞(der, die, das)は英語の the に相当し、「その～」、「あの～」「例の～」といった意味を持っています。」と書かれ、また不定冠詞については「不定冠詞(ein, eine, ein)は英語の a, an に相当し、「ひとつの～」、「ある～」といった意味を持っています。」と書かれている。<sup>21</sup> さらに無冠詞の用法については、例えばある教科書では「職業・身分、国籍を紹介するときや、言語、学問、スポーツ、楽器、飲みものなどには原則として冠詞はつけません」<sup>22</sup> という解説がなされている。

以上定冠詞、不定冠詞、無冠詞の用法の解説についてみてきたが、特に定冠詞、不定冠詞については文法上の性によってこれらを使い分けると、英語の the や a, an に相当するという簡単な説明にとどまっていることがわかる。

しかし英語の冠詞に相当すると解説されても英語の冠詞の用法が理解されていなければ説明したことにならず、英語の冠詞の用法について理解していた場合でも、職業、国籍などを述べる際の表現などのように、ドイツ語の冠詞は英語とは冠詞の扱い方が異なる場合も当然あるので学習者の誤解を招く可能性を否定できない。

さらにそれぞれの冠詞の日本語訳である「その～」「あの～」「ひとつの～」「ある」に注目すると、こうした訳を

直接ドイツ語の構文に当てはめて文を理解しようとしてもうまくいかないことも多いと思われる。例えば **Das ist ein Auto.** という構文に、「これはある自動車です」とか「これは一台の自動車です」という訳をしても、日本語としてかなり違和感のある表現となってしまう。また **Das ist ein Auto** と **Das ist das Auto** の違いについて日本語訳だけではわかりづらいのではないと思われる。そこで定冠詞や不定冠詞、無冠詞の用法そのものに関する説明が学習者から求められるようになってくる。

#### 4-2. CEFR の A1 レベルに準拠した教科書

ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)の参照レベルは、「学習者が言語をコミュニケーションの手段として使用するためには何を学ぶ必要があるか、効果的に行動できるようになるためには、どのような知識と技能を身につければよいかを総合的に記述しようとする」<sup>23</sup> ものである。参照レベルは A1 から C2 までの 6 レベルあり、それぞれの段階について全体的な尺度や自己評価基準、そして言語使用者に期待されている能力の基準が設けられている。<sup>24</sup> 全体的な尺度については、基礎段階である A1 レベルでは以下のことができることとされる。

- ①具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることもできる。
- ②自分や他人を紹介することができ、どこに住んでいるか、誰と知り合いか、持ち物などの個人的情報について、質問したり、答えたりできる。
- ③もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助け船をだしてくれるなら簡単なやり取りをすることができる。<sup>25</sup>

こうした全体的な尺度をもとに、各レベルの言語学習者に対して「受容的活動」、「産出活動」、「相互行為活動」の三分野で言語学習者に期待される能力が示されている。

例えば本稿で取り上げている冠詞の問題と関係があると思われる分野について見てみると、まず「受容的活動」の読む活動の事例において、A1 レベルでは「非常に短い簡単なテキストを、身近な名前、単語や基本的な表現を一つずつ取り上げて、必要であれば読み直したりしながら、一文一節ずつ理解することができる」能力が期待されている。

<sup>26</sup> また「産出活動」の話す活動の事例においては、「人物

や場所について、単純な字句を並べて、述べることができる」。<sup>27</sup>そしてこうした A1 レベルに到達するためには 45 分を 1 時間とする授業において 100 時間程度の授業時間が必要であり、90 分で週 2 回の授業なら 1 年間で、週 1 回の授業なら 2 年間で到達できるレベルであるとされる<sup>28</sup>。そのため最近の大学の授業で用いられるドイツ語の教科書はこの A1 レベルに準拠させたものが増えてきている。

ではこの A1 レベルに準拠した教科書では定冠詞、不定冠詞、無冠詞はどのように扱われているのだろうか。ある教科書では文法上の性にもとづいて区分されることが示されているが、どのような基準でそれぞれの冠詞を使い分けるのかについては説明していない。<sup>29</sup>別の教科書では文法解説の欄で文法上の性によって区分されることが、それぞれの冠詞の基本的な用法について簡単な説明がある。<sup>30</sup>A1 レベルとされている教科書でも、それぞれの冠詞についてはその扱いが様々であるが、取り上げられている内容は A1 という基準を設けていない教科書と変わりがなく、同様の問題があると指摘できる。そこで次はドイツ語の定冠詞、不定冠詞の説明で用いられている英語の定冠詞、不定冠詞、無冠詞の指導についてみていく。

## 5. 英語の冠詞指導に関する先行研究

ドイツ語同様英語の冠詞の用法も日本語母語話者にとって難しい。白畑知彦によれば、日本語母語話者の高校生を対象とした冠詞の誤りの傾向を分析したところ、定冠詞 the をつけるべきところでの誤りの総数が 891 あり、そのうち the にすべきところで不定冠詞 a(n)にした回数が 40 であるのに対し、何も冠詞をつけなかったという誤りが 791 あった。また不定冠詞 a(n)についても、不定冠詞をつけるべきところでの誤りの総数が 616 あり、そのうち不定冠詞をつけるべきところに定冠詞 the をつけた誤りが 61 であるのに対し何も冠詞をつけなかったという誤りが 439 あった。<sup>31</sup>つまり、冠詞の用法に関する理解が十分でないために母語である日本語からの負の転移が働いており、日本語の名詞に対する見方をそのまま英語にも用いて冠詞をつけない学習者が多数存在するということを表している、と言える。

それでは英語教育のなかで冠詞の指導はどのように行

われているのであろうか。関口智子は 2008 年から 2014 年までに出版された高校用文部科学省検定済教科書 99 冊を対象に、それぞれの教科書の中で冠詞がどのように扱われているかを調査している。<sup>32</sup>まず関口は 2008 年から 2010 年までに出版された教科書のうち 51 冊を対象に調査を行った。その結果大部分の教科書が冠詞を文法項目として取り上げず、定冠詞、不定冠詞、無冠詞の用法に関する記述が少ないことがわかったという。<sup>33</sup>さらに関口は 2012 年から 2014 年にかけて出版された教科書 48 冊を対象にこの調査を続けている。その結果、冠詞や名詞についての取り扱い方は最初の調査同様言及がないか、補足的な説明にとどめているものがほとんどであり、<sup>34</sup>わずかに 1 冊のみ、必要最低限の知識を端的にまとめているものがあった、という。<sup>35</sup>関口はこうした調査結果を示した後で、教科書に記述がない、または足りなくても教師がその不足を授業で補うのは可能であり、授業で教師が冠詞の指導を行うことで、生徒が冠詞の習得を通じて英語的なものの見方、とらえ方ができるようになるのではないかと指摘している。<sup>36</sup>それでは学習者の冠詞の習得を補助することができる指導というのはどのようなものがあるのだろうか。次節ではその指導のヒントになるのではないかとと思われる、伊藤笏康が行っている解説に注目したい。

## 6. 英語の冠詞に関する解説の一例

### 6-1. 普通名詞、決定詞に関する解説

伊藤は英語の冠詞の用法を説明するにあたり、まず英語の普通名詞の特徴について述べている。伊藤は普通名詞の 'cat' を例に挙げ、(1) 'cat' は日本語の「ネコ」と違い、個々の猫は指さないこと、(2) 'cat' はネコ概念つまり「ネコとはこんなものだ」という一般情報を指すこと、(3) だから 'cat' という名詞をマスターしたネイティブは、頭の中に (イ)ネコの性質のリスト(ネコ概念の内包)、(ロ)ネコの実例集(ネコ概念の外延)を備えている、と解説している。<sup>37</sup>

これに対して日本語の普通名詞、例えば「ネコ」は「ネコ」の概念とともに個々の「ネコ」も指し示することができる、つまり同じような性質を持った個体を一括して指すことができるため、英語の名詞とは異なると伊藤は指摘している。<sup>38</sup>そこで概念だけではなくこうした概念を備えた個

体を表す表現が英語の名詞には必要になってくる。このとき冠詞がその役割を果たすのである。

それでは普通名詞で個体を表すためにはどのようにすればいいか。伊藤は、英語では個体を表すために普通名詞に決定詞という言葉をつけていると説明している。そして決定詞には、①冠詞('a', 'the')、②指示形容詞('this', 'that')、③名詞、代名詞の所有格('Jack's', 'my', 'his'など)、④具体的な数の表現('one', 'two', 'three'など)、漠然とした数の表現('any', 'some', 'every', 'many', など)があると指摘している。<sup>39</sup> こうした決定詞の中から本稿では不定冠詞と定冠詞についての伊藤の解説をとりあげる。

## 6-2. 英語の不定冠詞に関する解説

不定冠詞の働きについて伊藤は①いっさい条件をつけず非限定的に、②個体を一個取り出すことであると述べている。<sup>40</sup> これを先ほど挙げた'cat'でいいかえると、(a)どの'cat'個体かはわからないが、(b) 'cat'という種類の一個体であることはわかる、という状態を表している。つまり「どの個体か」を表すのではなく「どんな種類の個体か」を表すほうが大切な時には不定冠詞が用いられるので、<sup>41</sup> 日本語で不定冠詞を表そうとすれば「一つの～」、「ある(一つの)～」、「～のどれでも(一つ)」という意味になる。例えば、

He bought *a flower* at a florist.

という文で、'a flower'は聞き手にとってある花の集合から取り出された「一本の花」である以上の情報はない。個体が特定できないということである。<sup>42</sup>

## 6-3. 英語の定冠詞に関する解説

伊藤は定冠詞'the'の用法をまず二つに分けて説明している。それは(1)文脈からわかる、特定の個体を指す用法、そして(2) 'the'がついている普通名詞の、概念そのものを指す、である。<sup>43</sup>

そして(1)については(1-1)以前の文脈から一つに決まる個体を指す、(1-2)日常文脈で一つに決まる個体を指す、(1-3)いきなり'the'を使い、新たな文脈をつくる、そして(1-4)初出の'the'を繰り返して使い、新たな文脈をつくるという用法にさらに区分している。

つまり(1-1)は「これまでの話にでてきた～」という形

で普通名詞を限定するさいに定冠詞を用いる用法である。伊藤はこの用法の例として以下の文を挙げている。この文でアンダーラインを引いた箇所にある普通名詞が、次に登場するときに定冠詞付きで表されているのを示している。

That's the young man's car,...I'll break the windows of *the car*.<sup>44</sup>

また(1-2)の、日常の文脈で普通名詞を限定するさいに定冠詞を用いる例として伊藤が挙げているのは、

Take this paper to *the president*.

という文であり、世の中に社長はたくさんいるが、「日常の文脈」のなかでどの社長を指すのかは既に定まっているわけであるので定冠詞を用いている。<sup>45</sup> ここでは一定の文脈がある→'the'を使う→個体が特定されるというプロセスを経ている、と伊藤は指摘している。<sup>46</sup>

次に(1-3)の、新たな文脈を作るために用いられる例として伊藤は、出社したらいきなり社長に呼ばれて

Shut *the door*.

と言われる状況を例に挙げて、ここで定冠詞を用いているのは、自分が今開けた「ドア」を閉めろ、という意味として理解される。<sup>47</sup> 伊藤はここで、'the'を使う→文脈を理解する→個体が特定されるというプロセスをたどっている、と指摘している。<sup>48</sup>

最後の(1-4)であるが、現実の出来事ではなく「一般論」を語る際に初出の定冠詞が使われる例である。伊藤はこの用法の例として、

*The mom* should stay home, and *the dad* should work.

という文を挙げ、ここで the mom, the dad と定冠詞が重ねて繰り返し使うことで「同じ家庭の中の」「母」と「父」と理解される、と指摘し、さらに伊藤はここでの the mom, the dad とともに具体的な人を指しておらず、「このような家庭がのぞましい」という「一般論」を表すために定冠詞を用いて抽象的な「母親」「父親」を使って文を表現しているのであると解説している。<sup>49</sup>

次に(2)であるが、これは(2-1)概念の内包を、一つの典型的な個体に託して表す用法と、(2-2)概念の外延(集合全体)を一つの個体として表す、という用法に区分している。

50

(2-1)であるが、伊藤は、

He is quite *the English gentleman*.

という文を例に挙げて、この文は『『英国紳士』というものを形にすれば彼になる』という意味に解釈されており、ここでの「英国紳士」という概念がそのまま個人にあらわれている、という意味になっている。<sup>51</sup>つまり、典型的の‘the X’というのは、(イ)‘X’概念の内包を完全に備えている個体を指定して、(ロ)それを‘X’の権化と考え、(ハ)いくつもある‘X’の代表とする、ということであると伊藤は指摘している。<sup>52</sup>

最後に(2・2)についてであるが、初出の *the*+複数名詞という形で、国民の名前などでよく使われている。しかしこの用法は「失礼な」意味になってしまうこともあると伊藤は指摘する。例えば、

*Americans should know the Russians.*

という文は、主語の‘Americans’が‘an American’の複数形であり、何人かのアメリカ人を任意に取り出した形になる。つまり具体的な人間が複数浮かぶイメージにつながるのだが、それに対して目的語の‘the Russians’は「ロシア人」をひとくくりにして、「ロシア人全般」として個人は無視して平板なイメージにしまっている、という。<sup>53</sup>

## 7. まとめ

本稿ではドイツ語の冠詞に関する先行研究や冠詞の指導に関する先行研究、そして教科書で冠詞はどのように説明されているかを調査したのち、ドイツ語同様冠詞が存在する英語の冠詞の指導に注目し先行研究を調査した。教科書における冠詞の用法についての記述は CEFR に準拠しているか否かに関係なく、説明が無いのか、英語の定冠詞や不定冠詞に相当する、などといった簡潔な説明にとどまっているかであった。また英語の冠詞の指導についても、少なくとも高校での英語教育においては冠詞の用法について言及がないか補足的な説明にとどまっていることがわかった。そこで伊藤笏康が行っている英語の定冠詞、不定冠詞の解説に着目し調査した。

この伊藤の解説を手掛かりにドイツ語でも同様の説明ができないか、を考えたい。そのために必要なのは、まず伊藤が行ったように名詞(普通名詞)に関する説明を丁寧に行うことであると思われる。つまり日本語の名詞と比較

対照するなどしてドイツ語の名詞の特徴についてさらに調査しわかりやすく説明できるよう準備する必要がある。

ドイツ語の名詞の特徴については、伊藤が述べた視点をを用いた名詞(普通名詞)の説明とともに、冠詞との関連を考えると文法上の性の区分を持つという点についても説明する必要がある。文法上の性の区分によって用いられる冠詞の形が異なるからである。

まず名詞の表す範囲の違いについては抽象的な内容であるので、まずスライドを用いて例えば「ネコ」の画像と「名詞のみ(例えば *Katze*)」と「名詞に冠詞がついているもの(例えば *eine Katze*)」という単語を一緒に示してその表す意味の違いを説明し理解を進めていくという順で授業が行えないかと考えている。ただスライドでしめす内容については、例えば名詞が表す範囲について「名詞だけで表せるもの」「名詞に冠詞がついたとき表すことができるもの」について解説するときどのような画像や文が妥当であるかは今後十分検討する必要がある。

文法上の性の区分の解説の際には、まず教室にあるもの(文房具や教室内の備品)を表す名詞それぞれが文法上の性の区分によって区分されていること、それぞれの区分によって使用される冠詞の形が異なることを画像などで示し説明していくことを考えている。そして、

A: Was ist das?(これはなんですか?)

B: Das ist ein Tisch.(これは机です)

B: Das ist eine Tasche.(これはかばんです)...

といった簡単な例文を用いて会話練習を行ってそれぞれの名詞に形が異なる冠詞が使われることを実感してもらい理解を深められないかと考えている。

次に冠詞の用法について、少なくとも初歩の段階で登場するものを選択して、それぞれについて伊藤が行ったように簡単な例文で解説できるようにしなければならないと思われる。

これについては、ドイツ語の冠詞指導の先行研究で指摘されていた通りドイツで出版されている文法書にも多少解説に違いがあるようなので、初歩の段階で用いられるものに限定してその用法に関する記述をさらに調査し、授業ではできるだけ簡潔に説明できるようにしていかなければならないと思われる。

そして、基本的な概念をスライドで示し、その後会話練習などを行って理解を深められないかと考えている。例えば会話練習であれば

A: Hast du ( )Laptop ?

B: Ja, ich habe ( )Laptop.

A: Wie findest du ( )Laptop?...

といったように不定冠詞と定冠詞両方が登場する会話文を用いて適切な冠詞を入れながら練習することができるのではないかと考えている。

今後本稿をもとにさらに冠詞やその指導に関する調査や検討を行い、今後の授業において学習者の理解を促進できるような解説を行えるようにしたい。

## 注

1. 伊藤笏康『言葉と思想』放送大学振興教育会、2011 年。
2. 関口存男『冠詞：意味形態的背景より見たるドイツ語冠詞の研究(全 3 巻)』、三修社、1960-62 年。
3. 有田潤『入門ドイツ語冠詞の用法』三修社、1992 年。
4. 細谷行輝、山下仁、内堀大地編『冠詞の思想：関口存男著『冠詞』と意味形態論への招待』三修社、2016 年。
5. 成田節、中村俊子『冠詞・前置詞・格』大学書林、2004 年、17 頁。
6. 同上、29 頁。
7. 同上、29 頁。
8. 同上、34-42 頁。なお、「⑨不特定多数を表す複数形に冠せる用法」については原文の表記に従った。
9. 同上、13 頁。
10. 同上、13 頁。
11. 同上、13-14 頁。
12. 下川浩「ドイツ語教育と言語実用論：冠詞の用法をめぐって」『獨協大学ドイツ文学研究』第 9 号、獨協大学学術研究会、1981 年 3 月、85-118 頁。
13. 同上、86 頁。
14. 同上、86-87 頁。
15. 同上、87 頁。
16. 同上、87 頁。
17. 同上、87-88 頁。
18. 同上、89-91 頁。
19. 同上、116 頁。

20. 例えば小黒びるぎった、日野安昭、佐藤方代『Wie bitte?: とにかくはなそうドイツ語』郁文堂、82 頁。
21. 小野寿美子、中川明博、西巻丈児『クロイツング・ネオ』朝日出版社、2014 年、14 頁。
22. 同上、78 頁。
23. 藤原三枝子、桂木忍、本河裕子、Anja Poller、Rita Sachse-Toussaint、柳原初樹『スタート! : コミュニケーション活動で学ぶドイツ語教授用資料』三修社、2009 年、6 頁。
24. 同上、7-8 頁。
25. 同上、7 頁。
26. 同上、9 頁。
27. 同上、9 頁。
28. 同上、6 頁。
29. 例えば、藁谷郁美、Marco Raindl、太田達也『ブリマ・プルス』朝日出版社、2016 年、10 頁。この教科書では文法上の性による冠詞の使い分けを最初に明示するのではなく、同じページの会話文などから冠詞の使い分けをまず学習者に推測させる課題が設けられている。
30. 藤原三枝子他『スタート! : コミュニケーション活動で学ぶドイツ語教授用資料』48 頁。
31. 鈴木孝明、白畑知彦『ことばの習得：母語獲得と第二言語習得』くろしお出版、2013 年、128 頁。
32. 関口智子「英語冠詞指導再考」『専修大学外国語教育論集』44 号、専修大学外国語教育研究室、2016 年 3 月、145-166 頁。
33. 同上、150-151 頁。
34. 同上、151-160 頁。
35. 同上、161-162 頁。
36. 同上、163 頁。
37. 伊藤笏康『言葉と思想』放送大学振興教育会、2011 年、53 頁。
38. 同上、65 頁。
39. 同上、73-74 頁。
40. 同上、80-81 頁。
41. 同上、81 頁。
42. 同上、78 頁。

43. 同上、121 頁。

44. 同上、108 頁。

45. 同上、108 頁。

46. 同上、112 頁。

47. 同上、111 頁。

48. 同上、112 頁。

49. 同上、113-114 頁。

50. 同上、122 頁。

51. 同上、116-117 頁。

52. 同上、117-118 頁。

53. 同上、120 頁。

朝日出版社、2016 年。

## 参考文献

有田潤『入門ドイツ語冠詞の用法』三修社、1992 年。

細谷行輝、山下仁、内堀大地編『冠詞の思想：関口存男著  
『冠詞』と意味形態論への招待』三修社、2016 年。

伊藤笏康『言葉と思想』放送大学振興教育会、2011 年。

藤原三枝子、桂木忍、本河裕子、Anja Poller、Rita  
Sachse-Toussaint、柳原初樹『スタート！：コミュニケ  
ーション活動で学ぶドイツ語教授用資料』三修社、2009  
年。

成田節、中村俊子『冠詞・前置詞・格』大学書林、2004  
年。

小黑びるぎった、日野安昭、佐藤方代『Wie bitte? : とも  
かくはなそうドイツ語』郁文堂、2009 年。

小野寿美子、中川明博、西巻丈児『クロイツング・ネオ』  
朝日出版社、2014 年。

関口存男『冠詞：意味形態的背景より見たるドイツ語冠  
詞の研究(全 3 巻)』、三修社、1960-62 年。

関口智子「英語冠詞指導再考」『専修大学外国語教育論集』  
44 号、専修大学外国語教育研究室、2016 年 3 月、145-166  
頁。

鈴木孝明、白畑知彦『ことばの習得：母語獲得と第二言語  
習得』くろしお出版、2013 年。

下川浩「ドイツ語教育と言語実用論：冠詞の用法をめぐっ  
て」『獨協大学ドイツ文学研究』第 9 号、獨協大学学  
術研究会、1981 年 3 月、85-118 頁。

藁谷郁美、Marco Raindl、太田達也『プリマ・プルス』